

氏名	八幡 眞由美
学位の種類	博士（ヒューマン・ケア科学）
学位記番号	博甲第 8318 号
学位授与年月	平成 29年 4月 30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	乳幼児連れが安心して外出しやすい環境に関する研究

主査	筑波大学准教授	博士（学術）	水野 智美
副査	筑波大学教授	教育学博士	徳田 克己
副査	筑波大学教授	博士（工学）	川口 孝泰
副査	東京都荒川区職員	博士（工学）	長野 博一

論文の内容の要旨

八幡眞由美氏の博士学位論文は、乳幼児連れの外出時の課題を質問紙調査及びフィールドワーク調査を通して明らかにした上で、乳幼児連れが安心して外出できる環境を提案したものである。本論文は、3つの質問紙調査と2つのフィールドワーク調査を実施している。その要旨は以下のとおりである。

第1章では、本論文における問題の所在と目的を明確にするために、国内外における乳幼児連れの外出に関する現状と研究動向を概観した。具体的には、国内における子育て支援に関連する法律の実施計画およびバリアフリーに関する法律の変遷をたどっていくことによって、バリアフリーに関する研究は高齢者や障害者に関するものが多く、乳幼児連れに関するものは少ないことを明らかにしている。また、1～3歳の子どもの外出に関する環境整備についての先行研究がほとんどないことを確認している。これらのことから、乳幼児連れが安心して外出するためには、ベビーカー使用者に限定せず、1～3歳の子ども連れの外出に関する研究の必要性が述べられている。

第2章（研究1）では、保育所に勤務する保育者を対象に質問紙調査を行い、保育活動中の散歩をする際に、移動上においてどのようなことをバリアと感じているのかを、ヒヤリハットを含めて明らかにしている。

第3章では、保護者を対象として研究を2件実施している。3-1（研究2-1）では、0歳～3歳の子どもを持つ保護者に対して質問紙調査を実施し、乳幼児を連れて外出する際の不安を明らかにするとともに、これまでに遭遇した困難や危険について明確化している。3-2（研究2-2）では、0～3歳の子どもを持つ保護者に対して質問紙調査を実施し、乳幼児を連れて外出の際に遭遇したヒヤリハットの経験を明らかにし、乳幼児を連れて保護者が外出する際に周囲に対してどのような配慮をしている

か、また、周囲にどのような配慮を望んでいるかについて明らかにしている。研究 1、研究 2-1、研究 2-2 を通して、道路移動、施設利用時、駐車場利用時のいずれにおいてもベビーカー使用者はベビーカーの操作性に関する問題にバリアを感じる事が多く、1～3 歳の子どもを連れて移動する保護者、保育者は子どもの歩行特性による事故やけがにつながる可能性のある項目にバリアを感じていることを明らかにしている。

第 4 章では、研究 1、研究 2-1、研究 2-2 の質問紙調査の結果をふまえ、乳幼児連れの外出先として頻度が高く、最も身近である子どもの遊び場や公共施設における乳幼児連れの外出のバリアとなっているおむつ交換、移動、授乳環境を中心にフィールドワーク調査を実施し、問題個所について詳細な分析を行っている。具体的には 駐車場から施設（建物）までのアクセス（駐車場、乗降場所、駐車場から施設までの通路、スロープ、階段）、施設（建物）内の利用しやすさ（出入り口、上下移動のしやすさ、トイレ（多目的トイレ、一般トイレの設備）、授乳室や休憩室）、周辺の道路の移動しやすさ（歩道の有無や幅、傾斜の有無）において、バリア発見型フィールドワークを実施し、問題個所について詳細な分析を行い、乳幼児連れを感じるバリアを明らかにしている。一例として、駐車場から施設までのアクセスの一つである階段では、蹴上げが高い、踏面の面積が小さい、階段の幅が狭いなどの問題を明らかにしている。このような階段では、保護者が一人でベビーカーを利用して子どもと遊びに来た場合、片手で子どもを抱きながら、もう片方でベビーカーを持って階段を上ったり降りたりしなくてはならず、保護者の姿勢が不安定になるとともに、足元が見えにくく、段の踏み外し等の危険性が生じる上、ベビーカーを持ち上げなくてはならないというバリアがあることを指摘している。

第 5 章では、総合的考察として、乳幼児連れが安全で安心して移動できる環境整備について、「行政」、「乳幼児と一緒に移動する人（保育士、保護者）」、「一般市民」の 3 つの視点より、考察を行っている。行政については道路環境（歩道、階段、横断歩道・信号他）、施設設備（駐車場、エレベータ、トイレ、授乳室・休憩室、公園他）に行政に求められる環境整備について、具体的に改善案を提示し、考察している。また、環境整備に関する点のみではなく、乳幼児の外出に関する理解教育について行政主導で実施する必要性を提示し、乳幼児連れと一般市民、双方の理解が深まり共存していくために、行政が両者に対して適切な配慮や指導を行い、両者にとって住みやすいまちづくりを進めていく重要性を示している。乳幼児と一緒に行動する人については、自己主張や自己のわがままと困難や危険を区別し、周囲と共存していく態度を養成する教育の必要性を示している。一般市民については、ベビーカー使用に対する理解をはじめとする乳幼児連れの外出に関する理解教育の必要性を指摘している。加えて、「困った人がいたら助ける」という社会システムの構築の必要性を述べている。

審査の結果の要旨

（批評）

本論文は、乳幼児連れが安心して外出することを支援するために物的環境、人的環境をいかに整備すべきかを質問紙調査とフィールドワーク調査を重ねて、詳細に明らかにしたものである。特に、ベビーカー使用者と 1～3 歳の子ども連れに分け、それぞれの外出する際の困り感やニーズを丁寧に調べるとともに、フィールドワーク調査を行うことによって、現実的な視点で改善点を提案している。このことは、乳幼児連れが外出しやすい環境を整備することに大きく貢献し、学問的意義は大きいと考える。本論文は研究の意義、独自性、妥当性、研究成果、論文のまとめ方において、博士論文としての水準に達していると判断できる。

平成 29 年 2 月 10 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。